

第37回

尾崎紀世彦の名曲に込められた「男の虚無感」のルーツ

物語の世界などでは、別の作品であつても同じテーマを扱っていたり、類似した関係性があつたりする場合、その作品を「姉妹編」と呼ぶことがあります。

昭和歌謡の世界には、私が勝手に「姉妹曲」と称している歌のペアがあります。ここで言う「姉妹曲」とは、大まかに言ってカバー曲を除く「異名同曲」のオリジナルとリメイク作品を指します。

園まりファンやザ・ピーナッツのファンなら周知のことでしょうが、『逢いたくて逢いたくて』は、昭和37年10月発売のザ・ピーナッツ『手編みの靴下』（詞・岩谷時子、作編曲・宮川泰）のメロディーだけを生かして、ほぼ3年後にリリースされたリメイク作品でした。

【手編みの靴下】（冒頭部歌詞）

小さな夢を編み込んだ 手編みの靴下

心の糸を巻きながら 一人で編んだの

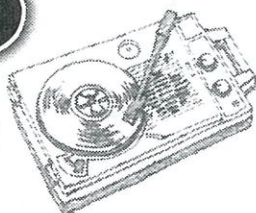
『逢いたくて』に出てくる「心の

糸」のキーワードは、そもそも女心を象徴する「手編み用の毛糸」だったことがわかります。

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



昭和46年のレコード大賞を受賞した『また逢う日まで』（詞・阿久悠、作編曲・筒美京平）にも「姉妹曲」が存在しました。その前年に発売されたズー・ニー・ヴーの第4弾シングル『ひとりの悲しみ』です。

ズー・ニー・ヴーはGS末期に登場した実力派グループで、リードボーカルだった町田義人はその後、角川映画『野性の証明』の主題歌『戦士の休息』を歌って、その実力が広く知られるようになりました。

『ひとりの悲しみ』の一番の歌詞には『また逢う日まで』と重なる箇所があります。

「なぜかきみしだけ なぜかむな

しいだけ―中略―そのとき二人（心）は 何かを見る（話す）だろう」（カッコ内は『また逢う日まで』における改変された歌詞）

姉妹曲の双方を作詞した岩谷も阿久も、歌手と題名は変われども、「恋した男性を理想化して思慕する女心」（岩谷）、「挫折、そして別れの寂しさに耐えようとする男の虚無感」といった「男女の心の奥底」を主題にするという点では変えることはありませんでした。最初に曲だけ聴いたときの第一印象をそのまま大事にしたかったのかもしれない。

歌詞に物語性を持たせるといふ点において天才的だった二人ですが、もう一つ共通した特技がありました。それは、どんな曲にも秀逸な歌詞をはめ込むことのできる「メロディー先行型」の作詞家だったことです。

岩谷は、宝塚在籍時代から音楽のみならず翻訳・翻案の世界に慣れ親しみ、一方の阿久は、広告の世界で決められた短い字数で端的に表現する訓練を積んでいました。

加えて二人には豊富な語彙力がありました。二人にとって同じ曲に別の物語をはめ込む作業がさほどむずかしい仕事ではなかったのには、それなりの裏付けがあつたのでしょう。